

G-2 木下竹次の教育と現代（生活人間学）

本州大学短大教育 溝上 泰子

木下竹次の教育と現代（生活人間学） 彼は1872（M・5）年に生れ、1946（S・21）年に奈良市で逝去した。享年75歳。師範、高等師範文科を卒業した。「学校の人」といわれるように学校教育、特に帝国主義教育体制の中で、自由主義教育を実践した。1911（T・8）年奈良女高師教授、同校付属小学・実科高女主事になった。ここで、全国津々浦々にわたって、学習研究会を組織し、彼独自の教育観をもって、わが国の初等教育界に一大革命をひきおこした。

教育の理念 自律、主体的学習を根本とし、生活によってよりよく生きることを得する。学習即生活、生活即学習で、学習生活を分割せず、全人格の渾一的発展を期する。人生全体を文科・理科・技能科に分け、技能科を重視した。身体教育は「体を鍛えるのではなく、むしろ身体で自分を鍛える」という発想である。また裁縫教育において「裁縫の心」を提唱し、伝統と習慣に埋没していた家事裁縫教育に革新的な窓を開いた。裁縫は身体的活動であり同時に知情意が揮一的に展開する、という。

裁縫心と「生活人間学」 私は昭和の初め、木下のもとで6年間、家事教育をした。彼は「家庭科は人生科だ」といって、直接指導さされた歩行・運針・庖丁の原理は、時空をこえて「生活人間」の中に再生した。生活者は時間・空間の交叉で、刻々存在と非存在、価値と反価値の根源的矛盾（久松真一の無の哲学）を生きつづける。これが全生活行動であり生きぶりである。ここに人間のふかまりがある。これが人間の生活である。木下の教育は今日の脳生理学、行動科学、老人学、生涯教育につながる。